

阪神・淡路大震災を身体が記憶しています

- 東日本大震災のとき、どこに誰といましたか。

自宅のリビングでテレビを見ていました。自宅は6階建てマンションの3階で、一人でした。被害は、リビングボードの絵が倒れたくらいで、何もありませんでした。夫は職場に泊まり、翌朝帰宅しました。長く揺れるので、これは普通の地震ではないと感じ、部屋の中で倒れてくるものはないか確認しながら、じっとしていました。テレビで震度の発表を見て、神戸での震災の経験から時間が経つと電話がつながらなくなると思い、すぐ関西の実家などに電話を入れました。

- 阪神・淡路大震災を経験なさったのですね。ご体験を話してください。

1995年1月17日、私は連休中のスキーに出かけ、夜中の2時頃帰宅しました。地震はその4時間後。私は、宝塚市の戸建2階の自室で就寝中でした。気が付くと、布団の端に座り込んでおり、その背後、今まで横になっていた所に本棚が倒れていました。その倒れた瞬間は、あまりの揺れに耐えるのが精一杯で気づきませんでした。地震の半年前に、古い祖母の家を建て替えたばかり。自宅内はひどい状況でしたが、家族は無事でした。しかし、裏に住む親戚は木造二階建ての二階にいたところ屋根が落ち、一時閉じ込められました。また、隣家の親戚は自宅が危険なため、我が家に避難してきました。

当時我が家にいた猫2匹は、私が帰宅した時には玄関先で眠っていたのに、地震後姿が見えなくなりました。もしかしたらどこかで下敷きになったのでは、と心配していたところ、1匹は2日ほど経って、もう1匹は1週間近く経ってひょっこり戻ってきました。頭のいい子の方が戻るのが遅く、どこにいたのだろうと家族で話しています。

それまで地震を怖いと思わなかったのに、大地震を経験して、ちょっと揺れただけでドキドキするという身体の記憶を残しました。一方、今いる場所がここならこれをするべき、これ以上は不要だと判断する基準のようなものができました。

- 最後にひとこと。

2度の震災を通じて、人々の意識がどう変わっていくのか、変わらないのか。様々な人生の転換を余儀なくされた方への思いやりや、自分に与えられた時間を有意義に活かして生きていくといった、プラスの方向への変化でありたいと考えています。